# 戴望舒の空白 ── 「われおもう」の周辺

三 木 直 大

## I

1934年から1945年にかけて書かれた25篇の作品を収録した，戴望舒(1905-1950) の生前最後の詩集『災難の歳月』が，上海の星羣出版社から出版されるのは，1948年２月である。

この詩集は1937年に書かれた「われおもう」に至る９篇と，1939年に書かれた「元旦祝福」以降の16篇との間に，ほぼ１年半の詩の空白の時期をはさんで，内容，形式の両面から大きく二つの部分に分けることができる。それを，前半を詩集『望舒草』(上海現代書局・1933年) 以来のいわば純粋詩的な方向を追求したもの，後半を抗日戦期の抵抗詩を中心としたいわば状況の詩とすることができるだろう。

その前半部分で特筆すべきは1936年に書かれた「眼」[1] である。作品「眼」は，「雨の巷」にはじまり「百合子」や「八重子」の遍歴を経て，「私の素描」から「夜行者」に至る，戴望舒の“夜歩きする人”としての歩行の到達点と位置づけられる。[2] そしてそれらの詩には，ボードレール，ヴェルレーヌからシュペルベールやエリュアールへと辿っていけるような西欧モダニズム詩の詩精神の文学史上の展開とか深化といえるものと，戴望舒の詩のそれとがパラレルになったかのような影響関係，あるいは符合のようなものがあった。

しかし，そうした方向性をもつ詩の，いわば文脈上の発展は「眼」で一段落をつけられ，流れはそこで止まったとでもいうほかはない作品が，まったくの詩の空白を前にして，三篇のみ書きつがれる。それが前半部最後の「夜の蛾」「寂寞」「われおもう」である。なかでも象徴的なのは，「われおもう」だろう。

われおもう　ゆえにわれは胡蝶なり……

一万年の後　花たちの呼び声が
ゆめうつつの雲霧の彼方から
わたしの斑の羽を振るわせにやってくる
1937年3月14日

たった4行。詩集に収録されたかぎりの戴望舒の詩のなかで四行詩は他に「蕭紅墓前即興」[3]があるが，これはあくまで即興詩であるから，構想された詩としては最短のものだといえる。だが詩の短さ以上に「われおもう」に特徴的なのは，その感動の希薄さである。「雨の巷」から「眼」に至るまでの戴望舒の詩の特徴となっていたヴィヴィッドで平明な叙情とでもいうものを，この作品に読み取ることはできない。ここにあるのは知的に構成されてはいても，明快さに欠け韜晦にみちた意識にみえる。

一行目の「われおもう　ゆえにわれは胡蝶なり」が，デカルト『方法序説』の「われおもう　ゆえにわれあり」のデフォルメなのは明らかだろう。その「われあり」が，『荘子』「斉物論」篇の“胡蝶の夢”におきかえられている。該当章句の全文は次のとおりである。

「昔者，荘周，夢に胡蝶となる。栩栩然として胡蝶なり。自ら喩みて志に適うか，周たるを知らざるなり。俄然として覚むれば，即ち遽遽然として周なり。知らず，周の夢に胡蝶となるか，胡蝶の夢に周となるかを。周と胡蝶とは，則ち必ず分あらん。此れをこれ物化と謂う。」

「むかし，荘周（わたし）は自分が蝶になった夢を見た。喜びいさんで飛びまわる蝶であった。楽しくてわが意にかなっていたからだろうか，自分が荘周であることがわからなかった。だが，ふと目ざめれば，まぎれもなく荘周だった。荘周が夢のなかで蝶となったのだろうか，あるいは蝶が夢のなかで荘周になっているのだろうか，わたしにはわからない。とはいえ荘周と蝶とには，もちろん区別があるだろう。万物の変化するさまとはこういうことをいうのだ」とでも訳せばよいのだろうか。「こういうこと」とは人間の生とは夢のようなものであり，仮象としてうつろっていくものだといったことだろう。

“胡蝶の夢”はあまりにも有名な一節である。そして「こういうこと」

の解釈には諸家に多様なものがある。それはこの箇所の解釈に，『荘子』を読む者の『荘子』理解が典型的に示されうるからだろう。『荘子』はいかようにも読める。その時代の文脈を離れて『荘子』の言葉は，言葉そのものの寓意性を獲得してしまっている。ゆえに曖昧といえばこれほど曖昧なものはない。そのことに注意しなければならないとして，しかし『荘子』のこの一節を戴望舒に重ねて読むなら，そのいちばんの要点は「夢に胡蝶となる。栩栩然として胡蝶なり。自ら喩みて志に適うか，周なることを知らざるなり。俄然として覚むれば，則ち遽遽然として周なり」という箇所であろう。彼のそれまでの生の，あるいはまた詩作の文脈つまり「雨の巷」から「眼」にいたる詩の流れが，夢から醒めたが如く切れ，その文脈がフィクションであったと彼自身感じたということになる。

とはいえもちろん詩という形式で表現されたことどもが，そのまま彼の人生の実像を表現しているわけではない。それらの詩はもとからがひとつのフィクションである。しかし作品は，意識的であれ無意識的であれ，個の伝達しようとするものの強い文脈のうえに成り立っている。さらには戴望舒の詩は，彼が学びとった西欧モダニズム詩のその流れにあわせて，自らも詩を書きついでいったかに思わせる整合性のようなものをもっていた。いってみれば作品というフィクションへの，彼自身の生活の意図的な一体化を読みとることさえ可能なものとなっている。だが「眼」でそれが最高潮に達したと思われたとき，そこでの達成と思われたものはあとかたもなく消えさり，あとに「われおもう」がおかれるのである。

## II

戴望舒がこうした場所にたちいたるには様々な要因が考えられる。そのひとつに生活上のことがらもありうるだろう。戴望舒の私生活については資料面での制約から研究はこれまでほとんど無いに等しく，わからないことが多い。それに戴望舒自身，自伝的な文章はまったく残していない。1987年に『戴望舒評伝』[4]が出たが，これがまとまった研究としては唯一のものである。彼の生活をたどるには，いまはともかくこれをはじめとした数少ない資料にたよるしかない。もちろん詩の理解に作者の生活の研究がどこまで必要かは疑問である。いくら作者の生活がすみずみまで明らかになろうと，それが詩を理解する決定的な要因として役立つわけではなかろう。

しかし，ともあれたどってみれば，戴望舒の1930年代の上海時代の生活上の大きな事件は，婚約，フランス留学，婚約解消，結婚，離婚，再婚というめまぐるしくもある身辺の変化に集約されてくる。『戴望舒評伝』によれば，1930年に婚約をしていた長年の文学仲間である施蟄存の妹・施絳年との結婚の約束が，フランスから帰国直後の1935年に解消している。その後知り合った穆時英の妹・穆麗娟と1936年に結婚。さらに1940年には彼女と別居，後に離婚。そして1943年に楊靜と再婚する。

ゴシップめいたことは多々ある。『評伝』の記述を信じるとするならば，1932年からのフランスへの留学は，結婚の条件に定職につくことを要求され，その手段として外国の大学での学位をとるためであったという。上海時代の戴望舒は雑誌の編集や原稿書きを主な生活の糧にしていて，これといった肩書はもっていない。おそらくは帰国後，大学の教師ということを考えていたのではと思われる。

施絳年自身がそのことを要求したのか，それとも周囲が関わっているのか，その辺りのことは全くわからない。だが，ともかく詩だけでは生活できるはずもなく，翻訳作品を発表したり，雑誌『現代』の編集に参画したりはしていても，結婚したとしてその生活を維持できるわけもなかったのだろう。

それにしても定職につくための手段としてフランスへの留学というのは突飛なようにも思えるが，“勤工倹学”やそれに近いかたちでの外国留学は当時かなりの程度に行われていたことでもあり，またそのような発想が彼の出自のもたらすものでもあった。しかし異国での副業での収入や翻訳をはじめとする原稿を中国におくったりの稿料稼ぎといったことではやっていけるはずはなく，留学費用そのものも含めて，ほとんどの費用は親族や友人たちの援助によっていたようである。フランス滞在が戴望舒にもたらした文学上の収穫は別として，この留学そのものは決して楽なものではなかった。

しかも中国とフランスとの距離と歳月が，婚約者との関係を表面的にはだめにしてしまいもする。定職をという要求など最初から口実であったかに思われないでもないが，1935年帰国直後に婚約は解消されてしまうのである。

穆麗娟とは帰国した年の夏に知り合い，翌年結婚をする。この結婚は上海への日本侵攻によって38年，一家で香港に逃れた後の1940年まで継続す

る。その年，義兄の穆時英の上海での暗殺事件がおこり，穆麗娟はその葬儀に上海に帰ったまま戴望舒のもとにもどることはなかった。そのとき彼が穆麗娟に宛てた手紙とその返信が残っている。[5]

「ぼくたちがある理由から結婚せねばならなくなったあの日から，この結婚がぼくたちに終わることのない苦しみをもたらすことになるだろうとは予想していました。ただぼくはあなたがいつかぼくを愛してくれるようになるかもしれないともずっと思っていました。いまその幻想は消滅しました。ぼくは死を選ぶことにします。離婚の要求は拒絶します。子供の朶朶はまだ5才です。子供を苦しませることはできない。そこでぼくは死ぬことでぼくたちの問題を解決することにしようと思います。そうすれば離婚と同じように，君を解放してあげることができる。」

自殺は断片的に残されている日記[6]によれば未遂のかたちでなされたようだが，この手紙自体も戴望舒の性格があらわれたような奇妙な手紙である。それへの穆麗娟の返信には次のようなくだりがある。

「六年前も今と同じように，あなたは自殺しようとしました。そのとき私はあなたの要求を聞き入れ，そして私たちは結婚したのです。今度は私は自分の考えを貫き，必ずあなたと離婚します。あなた自身がおっしゃっているように，私はもうあなたを愛してはおりません。」

「六年前」に何があったのか「ある理由」とは何であったのか，推測するすべもない。しかし結婚の年の10月の日付が付された「眼」の，「ぼくはぼくであることによって／ぼくはきみなのだ」という，自他の一体化願望が果たされたかのようにうたわれる詩句には，彼の結婚とその生活の葛藤が逆説的に表明されているのだと読み取ることもできなくはない。そして「われおもう」が書かれるのは1937年3月である。

またこの結婚がうまくいかなかった外的な要因としては，もうひとつ戴望舒の政治的な位置というものも考えられないわけではない。4・12クーデターによって挫折しはしたが，1926年に中国共産主義青年団に加入している経歴。1930年に左翼作家連盟に参加していること。その後の1933年の第三種人論争での発言。また香港での抗日活動など，彼の文学活動はその作品からも明瞭なように，いわゆる“プロレタリア文学運動”のそれとは隔たってはいるが，彼自身が“第三種人論争”で発言したように，その“同伴者”的な姿勢は継続されている。

戴望舒は“第三種人論争”には，フランスからジッドのソ連に関する発

言を紹介するというかたちで参加するのだが，[7] 1930年代後半になって，そうしたことが妻の縁者たちの政治的立場とあいいれなかったことも考えられないわけではない。国民党の図書雑誌審査（検閲）委員になったり，死の直前には汪兆銘政権のなかにいたりと，暗殺された穆時英自身の政治的立場も複雑なものであった。戴望舒の発言そのものは魯迅に叩かれもするのであるが，[8] その立場からみれば“共産党知識人”も，またその“同伴者”も同じ穴のむじなにみえたということなのかもしれない。

その後，彼は香港での反日活動により1941年冬に日本軍憲兵に拿捕され投獄，出所後の1943年に胡好の紹介で21才年下の楊靜と再婚。時を同じくして穆麗娟との離婚が正式に成立している。ちなみに戴望舒が定職らしきものにつくのは香港時代，『星島日報』の編集者となったときがはじめてであった。

戴望舒の「眼」に至る作品群の生まれた背景には，女性という他者との関係に象徴的にあらわれた，他者性と葛藤する戴望舒の人生のフィクションがあることは確かである。もちろん，離婚も再婚もそれだけでは，きわめて私的で個人的な体験にすぎない。ではこれらの体験が彼の詩にもたらしたものの本質とは何であったのだろうか。それはことさらに単純化していうならば，純粋詩の追求という方向づけをもっていた彼の詩精神にとってかわって，生活というもの，そしてそこにあらわれる実体としての他者というものが，彼の思考の日常に大きな割合をしめるようになったといった通俗的にして単純な出来事であっても不思議ではない。このことも彼の詩を「眼」以前と以後とでおおきく変えてしまった原因のひとつには考えられよう。「眼」以後，彼が詩を書かなくなっていったのには，穆麗娟との結婚生活が大きな意味をもっているように思える。

「眼」に至るまでの彼の詩は，30年代になって魔都といわれるまでにいびつに成熟してきた上海という都市の都市遊民としての単独者のいろあいがきわめて濃いものであった。戴望舒が参画した『現代』の創刊グループに共通しているのは，都市遊民的ということであり，後に付き合いをはじめた，また義兄となった穆時英がその代表的な作家の一人であった“新感覚派”と目される人々も，階層の本質はそこにあったといえる。戴望舒の恋愛詩は，その詩版といえる面がある。しかし結婚は戴望舒の性格とあいまっていずれ都市遊民という自己規定に破綻を忍び寄らせるものとなる。彼の詩の空白は，生活と詩の分裂が必然的にもたらしたのであったともい

えるのである。

さらに彼の「眼」までの詩作の方法を示した「詩論ノート」[9]の整合性のなさが示しているように，彼の詩はけっして方法的なものではなかった。「詩論ノート」は17条のアフォリズムからなる戴望舒の詩作上の原則とでもいうものだが，系統的な理論的枠組みをもつのではなく，その一条一条が独立した感覚的な表現体である。彼の詩作における変化ということでは「眼」がおそらく「詩論ノート」の限界点であろう。

戴望舒の詩作の本質は物語を書くように詩を書き，そこに自己だけではなく他者との生活までもを強引に重ねてしまおうとするような幼児的ともいえる欲望であったともいえそうである。「眼」において果たされたかのようにみえたその欲望が破綻したとき，それが次に「われおもう」を書かせたのではなかったろうか。

## Ⅲ

とはいえ「われおもう」を戴望舒の私生活にのみ還元してすませてしまうこともできない。そこに戴望舒の詩という姿を借りてあらわれた，中国のある層の文学者たちのいわば思想的な変転をもまた，みることが可能なのではないかと思われる。

『荘子』に出典があるから中国的というようなものではないし，それをどう読むかはそれぞれの個にぞくすることがらなのは当然として，しかし「われおもう」を，戴望舒のいわば“近代の超越”的な観念の出現とでもいったものと考えることはできないだろうか。というのはそうした概念を導入することによってみえやすくなるものがある。たとえば「眼」と「われおもう」の落差が説明しやすくなると思われるためだ。

「雨の巷」から「眼」に至る詩は単純化すれば，彼が学び影響を受けたボードレール以後のヨーロッパの詩人たちの詩精神の模倣のうえに成立している。西欧のモダニズム詩の流れはシュールレアリズムの文学運動のように，一見それを否定するようにみえるものも，やはり近代を近代として成り立たせる文脈うえに強固に根をはっている，あるいは束縛されているといえると思える。「雨の巷」以来の“みるわたし”と“みられるわたし”のヴァレリィ的な円環，「眼」のテーマとなっているエリュアールの「恋する女」に着想を得たかのような「ぼくはぼくであることによって／ぼくはきみなのだ」とする自他の一体化の願望，そうした詩の世界はここでも

単純化するならデカルト的な思考の二元論に基づく価値観念のうえに成立するものであるだろう。ならば「われおもう　ゆえにわれは胡蝶なり」はそうした世界への訣別とか否定とかいうところまではいかなくとも，少なくとも分離の意図を表明していることにはなる。

同じ頃にやはり詩が書けなくなった詩人の例は他にもみられる。ちょうどその頃から国共内戦が激しくなっていき，日本の中国侵略が始まるということがある。そうした現象をあえて一般化していうならば，西欧文学の影響下に出発した詩人たちが自分たちの文学の方向づけにいきづまる時期にさしかかってきたということだ。たとえば聞一多などもそうした例に考えられる。英米詩に影響を受け，アメリカに留学しというかたちで詩作を開始した彼が暗殺されるまでの晩年やっていたのは，中国の神話的世界の研究だった。同じように同時期，詩を書けなくなるという問題を抱えることになるという点では，1910年代生まれの詩人たち，たとえば卞之琳や何其芳といった人たちにもそうした方向性がみうけられないわけではない。それはそれだけ西欧的なものに自己を投影していった意図的なものに比例しているように思われる。

そこに同時期における日本のモダニストたちの，やがて“近代の超克”論議へとむかっていく停滞とも内省ともいえる意識のありようとの類推も考えられないわけではない。[10] 喧伝された“日本への回帰”というよな概念で考えてみることの意味は疑問のあるところだが，しかしその言葉がいいあてていた日本の近代化の欠陥の存在も確かであろう。政治的イデオロギーとして表れてしまった側面はひとまずおこう。とするなら，それが論理として表明された西欧的近代からの撤退あるいは否定を意味するだけの概念ではなく，またその発現の仕方におかしさはあっても，それぞれの個への内省の側面をもっていたことは否定できないと思われる。さらに付け加えれば西欧的なものがだめになったとか限界になったとかいうことでもまたなく，それをあたかも彼我の対立図式のごときものに描いて説明し表現しようとしたところに，虚偽意識をますます拡大させてしまう陥穽があったのではないか。そこに“近代の超克”という言葉のかかえる欺瞞があった。

しかしそれはそれとして，中国にもその中国版があってもおかしくはあるまい。そこにはおそらく同時代的に共通しうるような意識の何かがあった。戴望舒に即していえば，「眼」の破綻を否応もなく意識せざるをえな

い地点にたったとき，それまでの詩を否定するというのではなくとも，それまでのような詩は書けなくなるだろう。いや逆にそれまでのような詩が書けなくなったことが，そのような地点にたたせるのだといってもいい。こうした意識のありようは1930年代後半，抗日戦争が本格化するまでのエア・ポケットのような期間に，一定程度みられることがらであるといえる。そして，そこからの次への歩行は抗日戦争とそれに続く国共内戦へのそれぞれの巻き込まれ方によってひらかれていくことになるのである。

もし抗日戦争というものがなければ，戴望舒の詩は「われおもう」で終わっていたということもじゅうぶんに考えられる。晩年，手を付け始めた文献学のようなもの[11]のほうへもっと早くからいっていたかもしれない。そこに詩人にとっての歴史の皮肉とでも幸運とでもいうべきものが働いていないわけではない。それは『災難の歳月』後半部の抵抗詩に至ってはっきりとみえてくることがらである。状況が，あらわれた詩作をも含めた各人の表層の行動の差異を生みだしていく，ということなのである。

## Ⅳ

「眼」を次に発展させるものは「われおもう」にはふくまれていない。そして「眼」のような詩は繰り返して何篇もそのテーマのうえに書かれうるものではない。それは「われおもう」についても同じだ。「われおもう」に連なる作品がそれ以後書かれたというわけでもない。それはその一篇が書かれれば，すべてが表現されえたかのように達成と終末が同時にやってくるような作品である。詩の空白とは，たんに物理的に詩が書かれなかったという意味合いだけではなく，彼の精神における空白をも示しているのである。

だが，「眼」への一連の流れではなく，むしろ「われおもう」のような詩にこそ，彼の詩の本来性とでもいったものがあったのかもしれない。それを自ら打ち消すかのようにして，戴望舒は詩を書いたのかもしれないのである。そういう視点でさぐっていけば，「われおもう」の出現を予感させる，たとえば「夢をさがす人」のような詩も書かれていなかったわけではない。だから「われおもう」をたんに挫折の韜晦とのみとることもできないだろう。また夢から覚めたがごとき覚醒ともいえまい。これは彼の生きようとしたひとつの文脈からまたひとつの文脈への移行の葛藤を表現しているのだととることができる。だからこそ空白にこのような詩がぽっか

りと出現したのである。つまり「われおもう」は空白そのものの表現なのだ。それが感動の希薄さの所以ではないだろうか。

〔注〕

1）「眼」も「われおもう（我思想）」も初出は不明。ただし『災難的歳月』所収の詩にはすべて創作年月日がつけられている。詩集編集に当たって，その「歳月」を強調するためにつけられたものと思われる。ちなみに『我的記憶』『望舒草』『望舒詩稿』所収の作品に創作年月日はつけられていない。

2）拙稿「『雨の巷』から『眼』までの戴望舒」愛媛大学教養部紀要第XIX号。

3）「蕭紅墓畔口占」。創作月日は1944年11月20日。『災難的歳月』所収。初出は『文藝春秋』1946年10月号。『星島日報』の副刊『星座』に発表された口頭詩的なものには短いものが多いが，それらの作品は別のジャンルに属している。

4）『戴望舒評伝』，鄭擇魁・王文彬著，百花文芸出版社，1987年。

5）これについては『戴望舒巻』，唖弦編，台湾洪范書店。ただし未見で，『馮至・戴望舒詩歌欣賞』（盧斯飛・劉会文著，広西教育出版社，1989年）200頁～201頁から引用。

6）「林泉居日記（片断）」『香港文学』1985年2月号。

7）「法国通信」，『現代』第3巻第2期，1933年6月。

8）「又論“第三種人”」，『文学』第1巻第1号，1933年7月。『南腔北調集』所収。

9）「詩論零礼」。初出は『現代』第2巻第1期（1932年11月）に「望舒詩論」として掲載。『望舒草』に付録として収録される。

10）“近代の超克”論については主に廣松渉『〈近代の超克〉論－昭和思想史への一視角』（講談社・1989年）を参照。

11）「一百二十回本水滸傳的真僞」（『學原』第2巻第5期，1948年9月），『讀李娃傳』（巴黎大学北京漢学研究所，1951年）などの仕事がある。